第３回　川上ダムモニタリング部会　議事要旨

１　日　時　：　令和３年１２月１４日（火）　１４：００～１５：５０

２　場　所　：　独立行政法人水資源機構川上ダム建設所 ふれあいホール

３　委　員

部会長　池淵周一 京都大学名誉教授

委 員　江崎保男 兵庫県立コウノトリの郷公園園長

海老瀬潜一 元摂南大学教授

角哲也 京都大学防災研究所水資源環境研究センター教授

藤井伸二 人間環境大学人間環境学部人間環境学科准教授

松井正文 京都大学名誉教授

森下郁子 一般社団法人淡水生物研究所所長

（五十音順）

４．議事要旨

（１）令和３年度　川上ダムモニタリング調査結果について

○　オオサンショウウオについては、移転個体数が移転計画の内数であり、モニタリング調査では、上流個体の肥満度が減ることもない状況である。また、遡上路や人工巣穴も利用されている状況が確認出来ている。十分な調査がなされ、良好な結果が得られている。

○　植物の移植について、チャルメルソウは移植に向かない種と思われる。エビネ、ミヤコアオイ、シロバナショウジョウバカマは成功しているが、シロバナショウジョウバカマについては、生息環境が長期的に維持されるかが懸念される。

○　河床材料はダムや周辺工事の影響もあり、一時的に細粒化しているように見られる。試験湛水後には粗粒化する可能性があり、今後の粒度分布の変化と底生動物の変化について、これら変動要因の視点も踏まえモニタリングを行うこと。

○　部会での説明は具体的である必要がある。たとえば、「近年のオオタカの繁殖がみられなくなったことについては、保全努力を行っていることもあり、工事の影響が直接あるとは考えにくい。一方ではハチクマ、サシバが繁殖しており、川上ダム周辺地区は猛禽類が生息できる状況にあると思われる。また、結果の整理においては、ナラ枯れや流域の林相の変化についても着目していく必要がある。」

○　調査結果のとりまとめについては、単純な結果報告ではなく、因果関係等についても委員の知見も活用した形で検討・整理し、また、専門家以外にもわかるようなまとめとなるよう配慮すること。

（２）川上ダムモニタリング調査計画について

○　川上ダムの特徴を踏まえつつ、今後湛水開始後に予見される事象や、管理移行後に必要とされる事項を整理し、それに応じた調査及び解析を検討すること。

○　ダム湖の環境は、湛水後大きく変わるので、令和５年度の魚類調査を検討すること。

○　地域の活性化の観点からもダム湖の有効活用が重要であり、関係機関との連携や活用方針を引き続き検討すること。

以　上